

目的 わが国における家庭教育を歴史的に考察する一環として、岩手県域下の寺子屋で使用された郷土往来物を基礎資料に江戸末期の農民の子育てを考察する。

方法 寺子屋師匠が地域の実情に合わせて作成した郷土往来物のうち、波岡則忠著『農民電達往来』（1861）を主資料、武田三右衛門著『百姓用達俗言集』（天保年間）を参考資料とした。

結果・考察 二つの郷土往来物は、岩手県北部の農民としての在り方を示す教科書であるとともに、当時の農民生活、特に子どもの様子を記録したものであることができる。

『電建て』とは、『所帯を新たに作る』という意味。『分家は、金銭が多くかかるので、たくさんの子どものうち総領に家を継がせ、他の子は相応のところへ婿や嫁に出せば負担は少ない。しかし、他家の人になってしまうと、本家の相談事などに不便があるので、二男に嫁を迎え新しく家を持たせることにした』という設定で、「家」の存続を主目的とした農業生産や生活諸事に関する心得が述べられている。

子育てについての記述 (1) 幼少時の育て方が大切である。子を悪く育てることは、火事や盗難にあうよりも恐ろしく田畑まで失うことになる。(2) 小さい時にあまやかしてはいけない。かわいいからと、甘い菓子や高価なものを与えるのはよくない。(3) 子どもは親のすることを見て育つ。(4) 子どもはいたずらをするものである。むやみに叱るよりも気持ちをそらせるのが効果的である。(5) 農民向きの学問を。6、7歳になったら良い師匠を選んで算術や書を習わせる。子どもの生活や行動様式をよく見きわめ、それに即した接し方が必要であることは、現代にも充分通用するものである。